

男は妙にゆっくりした動作で、床にあぐらを組んで座った。ペニスが股間からそそり立っている。桜子はごくりと喉を鳴らした。

「自分から脚を開いて、俺にまたがれ」

桜子はギクシヤクと立ちあがると、セーラー服のプリーツスカートをそっとめくりあげた。男にまたがるようにして、そろそろと腰をおろしていく。心臓がドキドキと音をたてた。男根の熱い先端が、濡れた粘膜に触れた。

自分で腰を揺すり、位置を調節してから、ぐっと腰をおろしていく。

ちようど、和式トイレで腰をおろすカンジだ。

ぬちゅうう……。

濡れた音がした。

「あつ。ひっ、き……」

気持ちいい……と言いかけて、あわてて口をつぐむ。濡れて充血した膣が、熱いペニスを受け入れていく感触は気持ちよかったが、口に出すのは恥ずかしい。初めてのときのような痛みも恐怖もないぶん、気持ちいいと感ずることができるのかもしれない。

「きついかな？」



「そ、んなことは……な、ないけど……」

体位のせいなのか、お腹のなかをいっぱいに満たされる充足感と圧迫感は初めてるときより強い。亀頭が子宮口を突きあげた。行きどまりだ。胃が押しあげられる気分になる。

桜子は温泉に入ったときのように目を細め、しかめた眉をせつなくさげた。半開きになった口から、ペニスが身体に侵入した体積分、細く長い息を吐く。

男の端正な顔が目の前にある。男も気持ちよさそうに目を細めている。夏祭りの夜は殺人鬼か悪魔に見えた酷薄そうな表情も、無防備でスキだらけに見える。

男の視線と桜子の視線がからみ合った。初めてのときもそうだったが、身体をつなぐと心までもつないだような錯覚に襲われる。

「今度は謝らないのか？」

「バカ！ ど、どうして私が謝らなきゃいけないのよつ。謝るのはあんたのほうよつ」これが、セックスしている最中の男女の会話かと思いつながらも、憎まれ口がポンポンと飛びだしてしまふ。

「とりまきたちとセックスしてるんだろっ？」

「や、やってないわよつ。そんなことっ。こ、これが二回目よつ。文句ある？」

男のコたちが、桜子の身体をいやらしい目で見ていることはわかっていてた。初体験前は、おそらく気がつかなかっただろうが、目の色や視線の動きでわかってしまうのだ。

桜子はスキを見せないよう気をつけていた。男のコたちとは二人きりにならないようにしたし、性的な話にならないように気をつけた。まずい方向に話が転がると、泣き真似をして同情を引いた。

桜子が賢く立ちまわることができたのは、気心の知れない男とセックスするのがどんなに怖いのか、夏の日の体験で骨身に染み込からである。

「そうか。でも、おまえ、男たちと遊び歩いてるみたいだが」

「あいつらが、か、勝手に誘ってくれるだけよ。よ、要領のいい女のことは、みんなミツグ君ぐらいいると思うよ」

「いい気になってると、今に手ひどいしつぺ返しを食らうぞ」

桜子はふいと顔をそむけた。

男の腕がきついほどに背中を抱きしめた。

「俺は心配して言うてるんだ。おまえ、すげえ不安定で危なっかしく見える」

真心のこもった口調だった。テープで脅され、恥ずかしいことを強要されている最

中でなければ、思わずホロリとなっていたに違いない。

「私を縛ったり、暴れたほうがおもしろいって言ってたの、どこのだれよつ。バカッ」顔を引きつけて身体ごと顔をそむけると、ずっと動かないままだった膣のペニスが、存在を主張した。

「あつ」

話すことによつてそらされていた意識が戻つてしまい、子宮口がペニスの先端の感触を強く感じた。ズワンと重い衝撃とともに背中にゾクゾクする戦慄が走る。桜子が腰をもじつかせたのを合図にして、男の手が背筋を伝つて下におり、スカートをめくりあげ、お尻の山をきゅつとつかんだ。

「おまえのなかはあつたかいのに、尻の表面は冷たいな」

尻肉をつまむようにしていじりながら、背筋のくぼみが終わり、お尻の谷間がはじまるところのあたりを指でさするようにして動かしていく。男の指先が、お尻の穴のすばまりを捕らえた。

「やっやっ。な、なにをしてるの？」

腰を浮かそうとするのと、指先がめりこむのは同時だった。めりつ。